



Title	家庭科教科書の教育内容構成に関する研究：戦後初期家庭科構想と城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』の教科書分析
Author(s)	青木, 香保里
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7236号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.r7236
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99852
Type	doctoral thesis
File Information	AOKI_Kahori_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：青木 香保里

学位論文題名

家庭科教科書の教育内容構成に関する研究
－戦後初期家庭科構想と城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』の
教科書分析－

本論文は、戦後初期に成立した家庭科教育を対象として、その教育内容構成の原理と射程を理論的・歴史的に解明することを目的とする。具体的には、中学校職業・家庭科教科書である城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』（日本書籍、1954-1956）および教師用指導書『指導と解説』を中核的資料として取り上げ、同時期に展開した海後宗臣監修の職業・家庭科教科書群（『明るい町の生活』『明るい生活』等）も参照しながら、戦後家庭科が「生活」をどのような構造として教育内容へ組織しようとしたのかを検証した。

先行研究では、戦後家庭科の成立をめぐる制度的経緯や理念の変遷が主として論じられてきた一方で、教科書に具体化された教育内容の内部構造を、理論枠組みに即して精査する研究は十分ではなかった。とりわけ、家庭科が生活を対象とする教科であるにもかかわらず、生活がどのような構成要素の連関として提示され、学習活動や単元配列の中でいかに体系化されていたのかについては、分析の手がかりが共有されにくかった。本論文は、教科書を「教育内容の体系」として捉え、文章・図表・設問・活動課題の配置を含む教材構造を教育内容構成の原理という観点から読み解くことを主課題とした。

本論文が援用する理論枠組みは、上位から順に、①須田勝彦の「人間の本質規定」、②竈山京の「生活構造論」、③教授学・教育方法学における教材化の一般的理解（具体的分析技法）という三層構造として整理される。須田の理論は、教育学にとって大前提となる「人間とは何か」を問うとともに、教育内容が依拠する存在論的前提を与え、生活教育を「自然的・共同体的・歴史的・社会的諸契機の統一」として把握する座標軸を提供する。竈山の生活構造論は、生活を「主体—目的—手段—条件」の相互関係として捉える枠組みを提示し、家庭科の教育内容を、領域の羅列ではなく、構造の連関として分析するための中心軸を与える。さらに教材化論は、生活構造のどの局面が、どのような表現形式（設問、資料、実習、討議、記録など）を通して学習過程へ組み込まれているかを検討する方法論として位置づけた。

第1章では、戦前から戦後初期にかけて展開された教育科学運動の思想的潮流を検討し、家庭科成立の理論的背景を明らかにした。教育科学研究会を中心とする学際的知の連関の中で、生活の数量的把握、科学的認識、合理的改善を重視する方法が形成され、生活の現実を問い、生活を「構造」として把握し、最小限の事実に基づいて再組織するという志向が共有されていたことを示した。城戸幡太郎、留岡清男、小倉金之助、竈山京、浦辺史らの議論に見られる、生活問題の発見と解決を軸に科学と実践を往還させる構想が、戦後の家庭科の理論的基盤として継承された点を指摘した。

第2章では、1947年学習指導要領（試案）から1951年学習指導要領職業・家庭科編（試案）を経て、1957年学習指導要領職業・家庭科編改訂版へ至る制度史・カリキュラム史的展開を分析した。1951年段階では、「仕事」や「技術」を軸に、家庭生活と地域社会の実践を結ぶ単元学習が構想され、海後宗臣が教育課程全体の再編軸として「技術」を据え、生活技術と生産技術を媒介する教育内容を志向していたことを確認した。他方、1957年改訂では、教育内容の標準化と性別固定化が進行し、家庭科が本来有していた社会的・構造的射程が部分的に縮減したことを、制度的文脈とあわせて論じた。

第3章では、『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』と『指導と解説』を対象に、単元構成、内容配列、学習課題の設定、評価・振り返りの仕組みを含む教材構造を詳細に分析した。その結果、同教科書は衣・食・住等の領域を単に並列するのではなく、生活における「主体—目的—手段—条件」の連関を軸として、「課題設定—設計—実践—評価—再設計」という循環的学習過程を志向していたことが明らかとなった。ここでは、生活主体の意思決定や協働、価値・目標の言語化、資源（時間・物財・情報・技術等）の把握と配分、制度・環境等の条件理解が、相互に結びつけられた形で教材化されており、生活を構造的に理解し改善する力の育成が企図されていた。この構成は、竈山京の「生活構造論」と理論的に呼応するとともに、須田勝彦の理論が与える上位枠組みのもとで、「生活」を通した形成の論理として位置づけられる。

以上より、戦後初期家庭科教育は、単なる家事技能の習得を目的とする教科として成立したのではなく、教育科学の理論的蓄積を背景に、生活を構造として把握し、科学的・合理的に再構成する教育として構想されていたことが示された。とりわけ本論文は、生活構造論を分析軸として、「制度・理論・教材」を同一の座標上に配置し、教科書に内在する教育内容構成原理を「生活構造」の観点から実証的に析出した点に、研究の独自性がある。

分析手続きとしては、①教科書目次と単元群を学年間で再編成し、各単元における課題提示・資料提示・活動（実習／調査／討議）・まとめの配置を抽出した上で、②記述内容を「主体（生活者・家族・集団）」「目的（価値・目標）」「手段（技術・資源・知識）」「条件（制度・環境・地域）」に対応づけ、③四要素間の連関がどの局面で強調されるかを比較した。加えて、④城戸編教科書と海後監修教科書群について、生活設計の学習過程（計画→実行→評価）と、仕事・技術の位置づけ（家庭生活から社会的生活への橋渡し）の現れ方を対照し、教材化の差異を検討した。その結果、両者はいずれも「仕事」「技術」「生活課題」を中心に据え、生活の科学化・合理化を教育の軸としていた点で共通しているが、海後の教科書が教育課程全体を再編する技術的アプローチを特徴としていたのに対し、城戸の『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』は技術の取得を手段としながらも、より包括的な「生活設計の学習」を中核に据えていた。すなわち、海後の構想が「技術による社会生活の再組織」を志向していたのに対し、城戸は「生活構造の理解による人間生活の再生産」を志向していた。海後の教科書が教育課程の再編軸として技術の体系化を図ったのに対し、城戸は教育内容の再構成原理として生活構造の把握を位置づけた点に理論的な差異がみられ、前者が教育体系の再構築を、後者が生活体系の再構築を目指したという違いが、両者の思想的立脚点を分けているといえる。

特に、本論文では教科書中の全単元・全活動を「主体—目的—手段—条件」の四要素に基づいて横断的に整理し、それらの相互関係を比較可能な分析枠として明示した点は、本研究の最も新規な貢献である。以上の知見は、家庭科を領域配列型から構造連関型へと再編する際の設計原理を提示し、教科横断・地域協働学習の理論的根拠を補強する。これにより、家庭科教材が備えていた統合原理と設計の特徴を、制度史・思想史と結びつけて再解釈する道筋を示した。

今後の課題としては、戦後から現代に至る教科書・指導書を縦断的に分析し、生活構造の表象が、制度改訂や社会条件の変化とどのように連動して変容したのかを検証すること、さらに、生活構造論に基づく単元設計を現行教育課程のもとで試行し、学習の到達点（意思決定、資源管理、条件理解、協働的实践など）を授業評価の観点と結びつけて実証的に検討することが挙げられる。